

CVP分析の 具体的な方法

税理士法人ベルダ 代表社員
公認会計士・税理士
林 健太郎

管理会計とは経営判断に活用するための会計。先行き不透明な時代において、将来の予測をするために不可欠な業務です。今回はCVP分析の具体的な方法について解説します。



- 第8回 管理会計PLとCVP分析
- 第9回 **CVP分析の具体的な方法**
- 第10回 資金繰り表のつくり方
- 第11回 部門別損益計算書の要点
- 第12回 投資の判断方法 押さえておきたいKPI

利益を出しやすい体質を CVP分析で予測する

CVP分析の目的は、費用、売上高、利益の3つの関係を把握して、将来の予測をすることです。利益は、売上高から費用を引くことで求められます。この費用を売上高に連動する変動費と、売上高に連動しないで決まった額が発生する固定費とに分けます。そして、変動費は「売上高×変動費率」として表わし、これに固定費

を足すと費用になります。

ここでいう変動費率とは、売上高に対する変動費の割合のことをいいます。

(1) CVP分析図の読み解き方

グラフ1のCVP分析のイメージ図を見てみましょう。横軸を売上高、縦軸を金額とします。ここに、売上高と費用の線を引いていきます。

まず、斜め45度の線が、売上高線となります。横軸の売上高1に

対して、縦軸の売上高の金額も1になるので、角度が45度の直線と表わされます。

次に費用を見ていきます。売上高が0のところでも発生している部分が固定費になります。固定費は売上高0円でも1000万円でも、同じだけ発生します。これに対して、変動費は売上高が増えれば連動して増加します。このため、固定費の上に「売上高×変動費率」で計算される変動費が乗っかるように引かれた斜めの線が、費用線となります。

売上高が1増えるのに対して増加する変動費の割合が変動費率になり、費用線の傾きになります。たとえば、売上高100に対して仕入などの変動費が35の場合、変動費率は35・0%となり、費用線の傾きが0・35になります。

この売上高線と費用線が交わるところが損益分岐点売上高です。売上高と費用が同じ額になり、損益がトントンになる売上高を表わします。

(2) 変動費と固定費のバランスが利益に与える影響

ここでポイントとなるのは、変動費は売上高との「比率」で見ると、固定費は「額」で見ると

ところです。変動費と固定費のバランスがどのように利益に影響するのか、次の2つの特徴を理解しておきましょう。

① 変動費の割合が高い場合、固定費が少ない分、損益分岐点売上高は低くなります。しかし、損益分岐点売上高を超えても、変動費が多くなるので、売上が増加する割に、利益はあまり増えません。

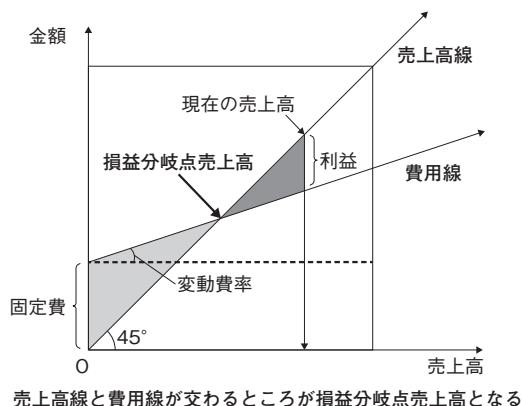
② 固定費の割合が高い場合、損益分岐点売上高は高くなり、多くの売上を上げないと利益が出ません。しかし、損益分岐点売上高を超えると、変動費が少ないので、利益が大きく増えていきます。

グラフ2で具体的に考えてみましょう。グラフ2のA社とB社は、現在、同じ売上高と同じ利益を出しています。

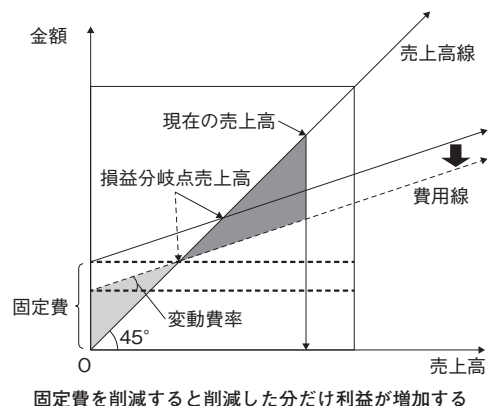
しかし、グラフ2の①を見ると、固定費の金額を表す切片（左側の縦軸と直線が交わる点）がA社のほうが上にあることから、固定費はA社のほうがB社よりも高いことがわかります。

一方、2本の直線の傾き（グラフ2の②）を見ると、A社の傾きのほうがB社よりも緩やかなの

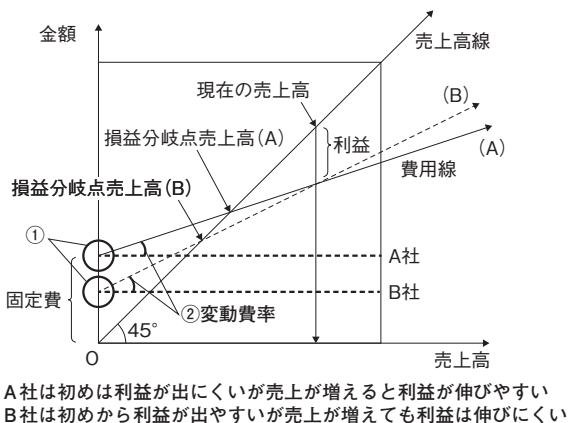
グラフ1 ● CVP分析のイメージ図



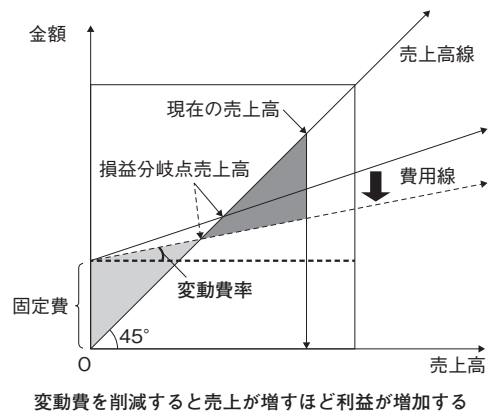
グラフ3 ● 固定費を削減した場合



グラフ2 ● 変動費と固定費のバランスが利益に与える影響 (A社とB社の比較)



グラフ4 ● 変動費を削減した場合



で、傾きを示す変動費率は低いことがわかります。

固定費が高額で変動費率が低いA社は、売上が少ないうちは利益がなかなか出ません。グラフからも、売上を示す直線が下方に遠く離れていることで、損失が多いことがわかります。

一方、売上が増え、損益分岐点売上高を超えてからは逆です。今度はA社の費用線よりも売上の直線は上方に遠く離れますので、利益が多く上がるようになるのです。

つまり、A社は固定費が多い分、初めは利益を出しづらく、売上が増えると一転して利益が出やすい体質となります。

B社は、A社の場合とは逆です。固定費が少ないため、初めから利益が出やすいものの、売上が増えても、

利益の伸びは鈍くなります。

固定費と変動費では同じ経費削減でも効果が違う

(1) 固定費を削減した場合

グラフ3のように、固定費を削減した場合は、費用線がその分だけ下に動きます。このため、損益分岐点売上高も下がり、縦軸で表わされる利益も、固定費の削減額だけ増えます。

たとえば、敷地に余分なスペースがある場合に、適切な広さの敷地の工場に引っ越すといったケースが考えられます。

(2) 変動費を削減した場合

グラフ4のように、変動費を削減した場合は、売上高に対する変動費の割合、変動費率が下がります。このため、費用線の傾きが緩やかになります。これにより、損益分岐点売上高が下がります。そして、売上を増やすほどにその効果は上がっていきます。

たとえば、比較的安価な海外メーカーの材料に切り替えるなどが当てはまります。

このように、CVP分析のグラフを見ると、変動費の削減と固定費の削減はそれぞれ違った意味合いを持つことがわかります。